

特別支援教育から学ぶ

平成 26 年度国立特別支援教育総合研究所（特総研）主催の特別支援教育教材・支援機器等展示会に参加するために、京都国際会館へ行ってきた。

特別支援学校で授業を見る機会があることや勤務する先生方と関わる中で、特別支援教育への関心がさらに高まってきた。

特別支援学校における教育そのものにも関心はあるが、通常授業の中においても特別な支援が必要な子供の存在があることと学習内容の理解を高めるために、特別支援の指導方法が役立つと考えているからだ。

今回は、特別支援に関した教材を見ることで、理科授業の教材・教具にも役立つことがないかヒントを得るために参加した。

さすがに強者揃いの展示会であった。

大学の研究者レベルから現場の実践家まで様々な展示・発表があった。

印象としては、ICTを活用した教具が多かった。

かつて教育工学に取り組んでいた頃は、当時の養護学校の先生方の実践がすばらしかった。現在でも、機器活用はすばらしいものがあった。特別支援学校の児童生徒たちは、学びや生活にさまざまな困難があるために機器活用はたいへん有用である。従って、ICTが教具に活用されていることは自然に理解できることである。

対して、手作りの教具も多くあり、見ていだけで感心し楽しいものであった。

でも、一番感心したことは先生方の教材開発へのパワーである。

教員は研究心が高い職種であると聞いたことがあるが、特別支援に関わる先生方は、指導対象の児童生徒の困難さや状況が一人一人ちがうことで、その個に対応するためには個の数だけ研究対象があることになる。そのため、日常的に研究する態度が身についているのだろう。

通常の児童生徒への研究以上に、それぞれの研究が明確な課題を持って進められているように感じた。

われわれ、通常学級の児童生徒を指導してきた教員にとって、特別支援に携わる先生方の熱意や研究に対する目的意識を見習わなくてはならないと強く感じた一日であった。

次年度は、通常学級の生徒が理科の授業において、理解しやすくなるように研究を深めていきたいと強く感じた週末であった。